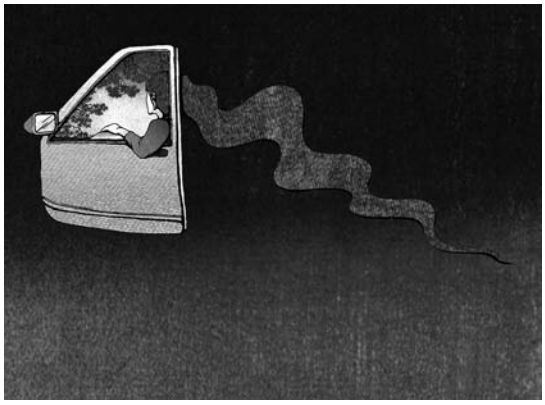
束芋
たばいも
アーティスト

# 適正人間

@Kagawa



束芋『悪人』より（2006〜07年）
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

私はつい最近まで、何の資格も持ち合わせていなかった。大学では教員免許取得の勉強も途中で諦めたし、学芸員の免許取得など、初めから無理だと思っていた。そして、社会人の大部分の人が持っているであろう運転免許ももちろん持っていなかった。原付免許を取りに行こうと何度か企んではみたが、早朝に起きるという不得意分野が必須であることを知り、断念した。

一生、無資格で通そうと思った矢先、突然訪れた環境と心境の変化に、前述した中で最も取得の可能性が低いと思っていた普通自動車運転免許を取ることを決めた。旅行気分を味わえることで、少しは私の心構えも変わるのではなかろうかという希望を託し、合宿での取得を選んだ。

「束芋は絶対運転に向いていない」とか、「年齢×一万円で取れたらいい方だ」などと脅されて合宿はスタートした。数年前取得した妹からは、「教科書を読んでいたら大丈夫だよ」と軽く言われていたが、机に向かう勉強が不得意である私は、共に参加した勉強する姿勢が備わっている二人の友人に引っ張ってもらい、何とかやり過ごしていた。

入校してすぐに受けた適正検査の結果が出たとき、私はとっても複雑な気持ちに陥った。この適正とは、いわゆる「普通の人」が良しとされるもので、例えば認知・判断・動作の速度を測るようなものも、遅すぎるのはもちろん、速すぎても適正から外れる。ある部分で個性的な人は、適正の枠から外れるし、全体的なバランスも崩れてくる。

私の場合は、すべての検査でばっちり適正圏内、すなわち徹底的に「普通の人」と判断された。この結果は、美術家という仕事を生業にしている人間としては褒められたものではないのではないか。

かつて私が芸術大学に通い始めたころ、個性的な友人たちを前に「自分は普通すぎるのではないか」という悩みを抱いていたが、卒業時にはそんな自分を完全に受け入れることで、自分の方向性を見出したと思っていた。見当たらない個性を目を凝らして探し出すことを諦め、前向きに歩み出したつもりだった。でも、心のどこかで、まだ見ぬ自分の個性にいつか出会える日が来るかもしれないと、ほんの少しの期待を残していたことが、複雑な気持ちの原因だった。

このたび、やっぱり真っ平らな自分を再確認させられた。「それも一つの個性だよ」と励ましてくれる友人たちの言葉を胸に、束芋は挫(くじ)けず頑張っていきます。

ちなみに適正人間の束芋は、免許取得に際し受けなくてはならない試験をすべて一発でクリアいたしました。